

2. 複雑な字形でも具体的な漢字は覚え易いこと

二番目の間違いは、まづ仮名を教へ、次に易^{やさ}しい字形の漢字から複雑な字形の漢字へと教へてゆくことです。ところが、二、三歳の子供に「中」といふ字を教へてもなかなか覚えてくれません。つまり「これが“なか”なんだよ」といって指し示すことの出来ない抽象概念を表した字は、幼^こい児にはなかなか覚えられないのです。同じやうなことが、虫とか鳥とかいふ字にも言へまして、虫といふ名の虫はゐないし、鳥といふ名の鳥は実在しません。だから最初は鳩とか鶴とか蟻^{あり}とかといふ実在を表した漢字から教へた方がずっと解^{わか}りが速く、直に読めるやうになります。又、複雑な漢字ほど記憶の手懸^{てがか}りが多いといふことが出来ます。これは人の顔でもさうで、複雑な顔をした人は一度会っただけで直に覚えられ、絶対に忘れません。

それと同じやうなわけで、子供たちは複雑な字形をした蟻とか鳩とかいふ字は数秒間で覚えてしまひます。そしてやがて蟻と蜂^{はち}、鳩と鶴といふ字には同じ形の部分があることに気がつきます。さういふ子供の指摘を待って虫や鳥といふ字を教へてやる。これが正しい教へ方だと

思つて居ります。かうしてこのやうな指導を受けた子供たちは、虫扁^{へん}の漢字を見れば、これは虫の仲間だと自分で推理する能力がついてゐるものです。

かうして私の教育では、鳩や蟻といふ字から鳥や虫といふ字、つまり、下位概念を表す字から上位概念を表す字へと、それも子供の自然に発見するのを待ってそれから教へてやる。かういふ指導をしてやりますと抽象的概念もよく理解できます。右とか左とかいふ字は易^{やさ}しい字のやうですが、知能の低い子にはなかなか覚えられません。しかし具体的なものから抽象的なものへといふ風に、学習を進めてやってみれば、抽象的なものにも興味が出てきて関心を持って喜んで覚えるやうになります。かうなりますと仮名もひとりでに覚えます。いきなり仮名^{かな}を教へたのではとても覚えないうやうな知能の低い児でも具体的な漢字から教へてゆけば、いつともなく仮名も覚えるやうになるものです。かうして子供たちは自然と能力の高い児^こに育つてゆくのです。